

東アジア共同体へのアポリアをどう乗り越えるか

白永瑞著、趙慶喜訳『共生への道と核心現場
実践課題としての東アジア』（法政大学出版社、2016年）を読む

川瀬 俊治*

「変わらないもの」と「変える」もの

わたしはいまどこにいるのか、何をしなくてはならないのか。意外と時間がたって気付くことが多い。いや、いまもって気づかないこともあるのかもしれない。

哲学者は夜に鳴くミネルバの梟に喩えられる。ものごとの本質（ロゴス、イデア）を探るには、即座の応答は苦手なのだ。だから夜鳴くのだが、しかし、哲学者でもない私が、朝起きたことを夜になってから判断するのは、そうとうのタイムラグができる。

そこで、この空白を埋めようとすることになるが、価値規範や行動規範とするのは、多くの場合は、既存の思考をたどるか、慣習であったりする。なかなか新たな価値判断、行動を生まない。善悪、白黒といった二者択一であったり、過去から続いている伝統的価値観や近代以降の支配的価値観であったりする。

かわせしゅんじ
*川瀬俊治

1947年生。奈良新聞記者、解放出版社編集部員をへて現在フリージャーナリスト

吉本隆明が「変わらないものこそ、思惟する対象だ」という趣旨の発言をしていたと記憶するが、全共闘世代の思想家が語る「変わらないもの」の思惟とは、「変える」ために「変わらぬもの」を研究しなければならない、という意味だろう。前述したように、既存の価値観、行動に走ることにもなる「変わらないもの」の思惟は、「変える」ために思考の足腰を何よりも鍛えることになる。

韓国（大韓民国）の中国現代史研究者白永瑞の本書は、第一部「東アジア論」、第二部「中国—韓国—台湾」、第三部「社会人文学と批判的学問」で構成されているが、集約的なテーマとしてまとめると、「変える」ために「変わらないもの」を考察すること、「変える」ことと「変わらないもの」の二つのタームに収斂できる。

実証史学が主流の中国現代史研究を字義通り受け取るならば、本書はそれほど目新しいものではない。実証的方法で歴史的解明するなら研究書は数限りないからだ。しかし、白永瑞は実証的論証を基礎におくことを肝に銘じながら（第九章 共感と批評の歴史学—「既存の歴史学における規律と訓練を経るべき」）、東アジアの分断構造を乗り越えるために、和解と共生を実現する東アジア共同体をめざすための実践的な問いを投げかけている。これこそ「現実から触発された問題意識を何よりも重視する」（本書「序」）白永瑞の現実との向き合い方が生んだ歴史研究の方法だろう。

中国哲学の研究者中島隆博が聞き手となった巻末所収の「白永瑞—同時代の証言者」は、半生記とも読めると同時に、研究のパスというべきものが率直に語られている。朝鮮戦争休戦協定後の一九五三年八月、韓国仁川で出生、両親は朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）から韓国に渡った「越南」民であり、生活は困窮を極めたこと、戦争の傷痕は、父にも影を落とし家庭内暴力に結びついたこと、その被害を受けてきた母への思慕の深まり、フェミニズムへの共感など—白永瑞という歴史家、思想家を生んだ原風景を知ることができる。

命運というべき幼い時代での出会いは、その後の人生に大きく影響する。白永瑞とて例外ではない。社会と時代にもまれながら葛藤して成長するなかで、

マイナーの存在との応答が顕著であり、人間破壊を生む暴力を憎み、それに抗することが原点となり、やがて当然のように軍事独裁政権に挑むことになる。学生時代、韓国の民主化闘争の渦中において、フレームアップされた民青学連事件で逮捕されるなどした。本書を通読して感じるのは、白永瑞の行動の幹には人間の生命への畏敬があることだ。クリスチャンである母親の影響の多大さを感じる。

学問の分野でも、人文学の「変わらない」あり方を「変える」営みを求める。そこには、人間の生から遠ざかることに歯止めをかけたいとする意志が働いている。人文学が科学と峻別され専門化していったことは、人間の細分化とみる。社会的矛盾の応答に疎くあってはならない。民衆の生活圏であられる葛藤、矛盾を社会科学的にもとらえる総合的学問としての社会人文学を構築する主張に顕著に表れている（第八章 社会人文学の地平を開く）。

ところで、読者は本書所収の論文（とりわけ第一部）に文体の濃密さ、緊張感を感じるのではないだろうか。たしかに平板な客観的論述する論文とは異質である。文体はその人となりを現すものだが、濃密な文体は、人間との距離、状況との距離の濃密さとパラレルだ。身体的な感覚が論文に反映していると中島隆博は指摘しているが、コミュニケーションの深さを抜きにして考えられない。白永瑞が本書の中で何度も説く「コミュニケーション」、あるいは「コミュニケーションの普遍性」は、南北に分断した朝鮮半島で生きる思想家だからこそたどり着いた概念だろう。

大分断構造と小分断構造

では、前述した分断構造とは何か。東アジア秩序の歴史的な矛盾から生まれた分断を意味する。歴史的に分断を過程（process）より構造（structure）から追及する方がより深いレベルで潜む関係を明らかにできるのだが、白永瑞は、帝国と植民地と冷戦が絡み合ってきた朝鮮半島を核とした考察が原点にある。

分断構造は大分断と小分断に区分される。中国帝国とその周辺、日本帝国とその周辺、中国と日米同盟の三つが歴史的に東アジアで刻まれたのが大分断構造だ。前二者は帝国、植民地、最後の中国と日米同盟が冷戦という分断になる。これに対して小分断とされるのが、朝鮮半島の南北分断、中国の台湾の兩岸関係、在日米軍基地の集中する沖縄がある。

本書のタイトルにもなっている核心現場とは何か。冷戦、植民地、帝国が三すくみで人びとの主権を奪うことで矛盾、葛藤があらわれるのが小分断の場であり、その矛盾、葛藤を乗り越える営みがあってこそ、東アジア共同体構築のための核心になるという意味で核心現場なのだ。

たしかに、一九九〇年代、脱冷戦時代に突入して、自由陣営と共産陣営という地域秩序が解体された。朝鮮半島の南北政府は一九九二年二月一七日に二つの合意文書「南北基本合意書」「朝鮮半島非核化宣言」を発効させたのは、核心現場から生まれてきた大いなる希望だった。しかし、以降の展開は、核を保有することで「大国」となろうとする朝鮮と、巨大な核保有国、超大国アメリカとの対決をみせる様相となっている。

「『大国』となろうとする朝鮮」の表現は誤解を生みそうだから補足すると、いくら朝鮮が東京都の予算に比してはるかに及ばない国家予算規模の国としても、核保有の三本柱（戦略爆撃機、大陸間弾道ミサイル、ミサイル潜水艦）のうち戦略爆撃機を除き二本柱開発を宣言することは、哲学者ギュンター・アンダースが『核の脅威—原子力時代についての徹底的考察』（法政大学出版局、二〇一六年）で規定したように「全体主義と核による全能が対になしている」構造は、小国であっても「核による全能」とみるからこそ開発を至上命題として急いだのである。対決するアメリカに比するためである。さらに全体主義が背後にあるからこそコマを進められたのである。同じくギュンター・アンダースが『時代おくれの人間』下（法政大学出版局、二〇一六年）で、指摘したように、ヒロシマ、ナガサキの原爆投下以降、人類はかろうじて生きているにすぎない状況は変りない。

このような峻厳な事実、冷戦解体から四半世紀、東アジアに新たな地域秩序は形成されていない現実を突きつける。一方でアメリカの軍事支配、覇権主義が日・韓・台で続き、国家の存続をかけて核開発の一方で道を進んできた朝鮮、その背後に一〇〇年も続いた変わらぬ中国の支配構造・華夷秩序（天下主義）の現代版として、「大漢族主義」がある。日本はアメリカの戦略的視点に追従することで、戦前の東アジア侵略を清算することなく歴史を刻み、中国の影響抑止を見据えて、アメリカに加えて、インド、オーストラリア、ニュージーランドまでパートナー間の連携を深めている。

二〇一七年のいま、こうした情勢下、東アジアで領土紛争、歴史的葛藤、相互嫌悪感情が沸騰しているのである。

「人民主権」はなぜ求められるか

白永瑞は、韓・中・日の東アジアで「新たな普遍性」を求める言説が各国で現れていることを指摘する。韓国は白永瑞が代表されるが、日本では「東アジア共同の家」をとらえた和田春樹、姜尚中がいる。中国では陳嘉映が本書注で簡単に紹介されている。陳嘉映は抽象的な普遍性を批判し「地上的普遍性」の具象化を求めているが、本書では自由主義派の許紀霖の「新天下主義」の論説を分析する。現中国政府が「偉大な中華民族の復興」（中国夢）を追及する根本原因を民族国家至上主義とみる許紀霖は、伝統的な「天下主義」の「脱中心と脱ヒエラルキー化」をはかることで、「共有する普遍性」を生むと主張する。白永瑞はその「共有する普遍性」から「一国二制度」（日韓では「多文化共生」に該当）の複合型ネットワークの誕生を説く。しかし、「新天下主義」が中国の香港、マカオ、台湾の周辺や辺境の周辺民族から問い直す「コミュニケーションの普遍的性」があるかどうかを問うとどうなるのか。つまり、対等な、水平関係のコミュニケーションである。民主主義のアルファでありオメガである「言論の自由」の原則にあくまでも立ち返る。許永瑞は、許紀霖の「新天下

主義」は、大分断構造を構成している中国中心の思考からなお自由でないともみるのだ。

そこで、「新天下主義」を超える「新たな普遍性」を提起する。主権を奪われた東アジアを周辺とみる眼と、東アジア内部で支配・位階秩序で抑圧された周辺への眼を合わせもつこと、これを白永瑞は「二重の周辺の視座」と呼び、大分断構造を生み出している華夷秩序、帝国主義、覇権主義、大国主義を、周辺、それも「二重の視座」から捉えなおすことが大分断構造を「変える」ことのカギとみるのだ。

「周辺の二重性」からの視点は、「主権の分有」を導き出すことになる。ここで登場するのは白永瑞の思想の核心である前述した「コミュニケーション的普遍性」である。中島隆博がジャック・デリダの「主権の partage」（分割／分有）から導き出した人民主権に直結する。同一地域で複数の主権が重なるためには、「政治的に完全な人民が主権者として自らを統治する」人民主権と名付けられるものが求められる。国家主権や国民主権では解決できない場、つまり核心現場でこそ効力を発揮するのが、「主権の分有」たる人民主権なのだ。

沖縄と韓国の核心現場から問う

沖縄の現在をみることで具体像が浮かべることができるだろう。韓国・済州島の海軍基地建設（二〇一六年二月竣工）と沖縄の辺野古・高江の米軍基地建設に反対する韓日の民衆運動はその一例だ。

核心現場こそ国家の暴力が降り注ぐ最前線なのだ。沖縄・高江のヘリパット基地建設に対する非暴力で挑む民衆運動は、国家暴力で蹴散らかされている事実には愕然とする（拙稿「非暴力で貫く沖縄・高江のヘリパット工事阻止の闘い—政府はなぜ民意を無視し続けるのか」〈『部落解放』二〇一七年二月号〉参照）。詳しくは紹介しないが、二〇一六年七月の参議院選でも沖縄の民意は明らかだ。辺野古・高江の新基地反対を示した。しかし、開票の翌日、高江の工事再開を

政府は表明、人々の民意は完全に無視された。しかし、沖縄の人たちが国家主権の犠牲になっていいはずはない。白永瑞が沖縄における生活圏を重視（台湾漁民との交流、共通の漁場など）するのは、国家主権ではない国民主権でもない、「主権の分有」たる人民主権を具体化したものだ。

もう一つの具体化は自治権強化だ。先の生活圏の充実こそ、尖閣列島問題で激突する日中の国家主権紛争を解決する方途を示すことになるが、現在の自治権のあり様では、無視されることは明らかだ。自治権強化の主張は必然的に出てくる。結局、小分断の変革とは主権を問うことにあるのだ。それも核心現場を「変える」ことに留まらない。以下は新崎盛暉の主張だが、沖縄（琉球）独立という願望を持ちながら、沖縄の自治権強化を通して日本国家を変えていくこと、さらに背後にある日米同盟に影響をもたらすことも視野に収める（第一章 核心現場に見いだす東アジア共生への道）。

もう一つの核心現場・朝鮮半島はどうか。分断国家であるベトナム、ドイツは三〇年から四〇年で統一がはかられた。しかし、南北朝鮮は分断から七〇年近く経過する。固定化され、分断を既成化した分断体制論が説得性をもってきているように思える。しかし、許永瑞は、白楽晴が二〇〇〇年六月の南北首脳会談の成果を「分断体制自体の終息」につながると位置付けたように、分断体制に組み込まないも、「揺れる分断体制」が解体期に入ったとみる朝鮮半島の姿を構想することにいささかの迷いはない。

朝鮮民族はたしかに日本の植民地支配の軛から解放されて一度たりとて国民国家を実現していない。しかし、先達は命がけの試みを重ねてきたのである。七四声明といわれる一九七二年七月四日の祖国統一の三大原則「自主的・平和的・民族の大同団結」に合意や、七四声明直後に発表された千寛宇の複合国家論、一九八九年四月二日、鄭敬謨が文章を作成し文益煥牧師と朝鮮祖国統一平和委員会委員長の名で発表された「四・二南北共同声明」、既に述べた一九九二年の「朝鮮半島非核化共同宣言」、「南北基本合意書」、金大中、盧武鉉が金正日総書記と結んだ南北共同宣言（金大中の「六・一五南北共同宣言」

盧武鉉の「南北一〇・四宣言」などが積み重ねられてきた。国際関係では、朝鮮半島の非核化をうたった二〇〇六年の六か国協議による九・一九共同宣言も加えねばならないだろう。

とりわけ、これほどの歴史的蓄積が南北両国にあることは、南北両国が断念することなく統一した国民国家をめざしてきたことにほかならない。「六・一五南北共同宣言」は、統一問題に新たな角度から硬直した南北関係から脱する道を切り拓いたが、白永瑞はこの「六・一五南北共同宣言」を取り上げる。六・一五南北首脳会談で合意された「国家連合あるいは低い段階の連邦」は、白永瑞が言う「複合国家」への道を意味する。南が北を吸収して統一するものではなく、南、あるいは北が主権を一方的に主張するものでもない。既に述べた「主権の分有」である。韓国が平和国家となっていくことが、相互作用により朝鮮も平和国家に転換する希望を見出す(第四章 平和に対する想像力の条件と限界)。

本書のなかで幾度か出てくる重要な用語は「アメリカの覇権主義」である。民主主義の深化、即ち人民主権と平和国家の追及、生活圈交流の三つの軸が国の境界をも超えていくという動力があつてこそ、朝鮮半島、沖縄という小分断が変化し、「アメリカの覇権主義」に地殻変動が当然起きてくることになる。東アジア共同体はその三つの軸が相互に活性化することでしかコマを進めることができない。

一方、中国の覇権主義という言葉が見当たらないが、既述した許紀霖の「新天下主義」は、伝統的な「天下主義」を「脱中心と脱ヒエラルキー化」する方向性を提起した。これは中国の覇権主義を乗り越えようとする営みなのだが、白永瑞はさらに進めて、中国という中心に収斂されないコミュニケーションの対等性をもつことで中国の辺境や周辺領域にある小分断構造での変化を生んでいくとみる。ここに至り、東アジア共同体を予見できるのである。

さらに、「主権の分有」で付け加えねばならない事象がある。親友の崔順実容疑者の国政介入事件で朴槿恵大統領退陣を求めるろうそくデモだが、二〇一六年大晦日の土曜日の集会で、一〇月末からの二カ月間のデモの参加者

一〇〇〇万人を記録した（インターネットメディア「オーマイニュース」のライブ中継より）。

私は参加者一五〇万人を記録した一月二五日夜の集会を取材したが、ソウル市の中心街、光化門広場から南北に続く世宗路、ソウル市庁舎までの約一・五キロ、その間に交差する東西の道路は市民で埋め尽くされていた。過去、多数の参加者をみたデモをいくつか知っているが、これほど平和的に非暴力で整然と行われるデモははじめてだった。

集会の構成団体は一五〇〇にも及ぶが、午後七時のデモとは別に、構成団体ごとの小集会が行われた。中高校生、障がい者団体、労働者、女性団体、宗教者など行われたが、二〇〇八年の「ろうそくデモ」でもソウル市庁舎前で、幾つもの輪になり討論が繰り広げられていた。私はその光景とだぶらせたが、二〇〇八年は多数の参加者が開いたデモのあとであり、今回は夜のデモとは関係なく開かれたのとは大きな違いをみせた。今回は発言の場が確保されての小集会であり、人民主権は具体化してきたとも受け止めることができる。

国民国家の激突の場、冷戦がぶつかる場こそ試金石

白永瑞の書を読むと、分断体制に慣れきっている私たちには、自らの思考の貧弱さに赤面すら覚える。有効と思われる方法、人びとの喊声は日本の政治状況のもとでは、大きな力をもつことができないでいる。あれよあれよという間に、「憲法九条」をいただく国から、アメリカの東アジア戦略に随伴して海外派兵への軍事法制の拡充をはかる「普通の国」になっていく。遠因はどこにあるのか。

日本の近代は中国王朝を「宗主国」とする一〇〇〇年に及ぶ冊封体制を西洋列強諸国のあとを追うように改変して、蝦夷島（当時呼称、現北海道）、さらには独立国琉球王国を自国領土としたあと、軍事国家として中国（清国）、朝鮮王国を侵略した明治以降の歴史を歩んだ。冊封体制下では外園であった日本が、皇帝（明治天皇）を内園に置き換えることで、伝統的な中国の天下主義を

覆そうとしたのである。前述した「近代以降に発生した価値観」とは、西洋による「新たな普遍主義」であり、「尊王攘夷」は、いみじくも、内園として「夷敵」には命名した幕藩体制がある。福沢諭吉が中朝を「悪友」と規定して（『時事新報』）、夷敵的位置付けを行ったことはよく知られている。

日本は敗戦前と後では大きく情勢が変化した。敗戦前の日本は日清、日露戦争を経て、台湾、朝鮮を植民地下し、一方、「欧米からのアジアの解放」「東亜新秩序」を掲げ「大東亜共栄圏」を目指した。敗戦後は旧植民地出身者をこれまでの日本国籍から一律外国籍に一編の行政通達（法務省民事局長通達）で行ったように、一八九五年からの台湾、一九一〇年からの朝鮮王朝の植民地支配を忘れたかのように、戦後復興をひたすらめざした。

かつての「大東亜共栄圏」の「理想」も瓦解するのだが、米ソ冷戦に組み込まれることで、アメリカの戦略的な視点に追従する。たしかに、一九五一年のサンフランシスコ平和条約締結では日本の戦時賠償放棄を促すことでも成立したものであり、日本はアメリカ主導で連合国支配から脱して国際舞台に復帰、過去清算では未成熟なまま経済大国になっていくのである。

明治憲法の国家無答責に加えて、アメリカの極東戦略により、アジア、とりわけ東アジアは、アメリカのバイアスを通してしか認識できない道をたどった。大分断を形作った大日本帝国は、戦後は自民党一党支配のもと、戦前からの支配体制が温存、復活されてきた。大分断構造下の分断体制に安住する舞台は実は大日本国憲法施行の時代から継続しているのである。

日本で初の翻訳本になる白永瑞のこの本は、大分断を「変わらないもの」とする人たちは、こう言うだろう。「国の境界を越える生活圏の拡大などできない」「核支配の時代に現在の秩序が変わるはずなどない」と。しかし、現状に満足しない希望こそ生の源泉である以上、平和と自由・平等を行動原理とすることで、現状の民主主義のかたちを変えていこうとするマグマは人びとに蓄積されている。まずは、と言っても困難な道だが、国民国家の激突の場、冷戦がぶつかる場をどう乗り越えるのか。前者は、竹島（独島）と諸島、後者は朝鮮

半島西海に広がる北方限界線である。いずれも生活圏を共有する漁民が平和的に共助する海として立ち返える場なのだ。(文中敬称略)

